

相模原から沖繩を想えば

小牧 みどり

沖繩に行つてから、相模原の我が家の上空を飛ぶ、自衛隊のヘリや米軍機の騒音が今までとちがつて聞こえるようになった。今まではうるさい、やかましい、テレビが聞こえない、電話が聞こえないという苦情だった。沖繩に行つてから、米軍機の騒音はわたしの気持ちをぞっとさせる。暗く、憂鬱にさせる。あの飛行機はベトナム、アフガニスタン、そしてイラクへ行つた米軍機なのかと思う。基地がある限り、わたしたちは加害者にさせられている。被害者であるよりも加害者ではないか。このことをもっと知りたいたいと思う。イラクのフールージャでなにがあつたか、沖繩の名護市辺野古の、命がけの海の闘いをテレビでやつたのだろうか。

沖繩に行つたのは、去年の12月が初めてで、生協の平和学習の旅だった。3泊4日の忙しい戦跡基地めぐりで観光など全くできず、首里城にも行っていないかった。それ以来、沖繩病で、頭から沖繩が離れず、寝ても覚めても沖繩を想つて泣いていた。

そんなわたしに、もう一度沖繩に行く

機会がやってきたのは今年の2月だった。那覇市内で「日米軍事再編・基地強化と闘う全国連絡会」結成集会。2月3日、23団体、70人が参加した。(2月10日号『週刊金曜日』の「金曜アンテナ」に写真入りで掲載。左の半袖の女性がわたし)その前日に新しい市民の会を立ち上げる準備会があり、わたしも共同代表になる予定だったので下手な報告をした。わたしはあまりにも知らなかった。知らされなかった。沖繩の人びとの苦難を、命がけの闘いを。辺野古で座り込みを続けているおじいやおばあに、どんな思いをさせているのか。挨拶する前に、まずそのことをお詫びした。そのときの沖繩の人の優しさは、以後わたしを奮い立たせている。沖繩を想えば、わたしでも何かできる、やつてみせると思つている。

でも、主婦として庭のバラの手入れ、ピースという名の黄色いバラを咲かせることも忘れないで、猫の世話もしながら、日常のありふれた平和を守りたい。先鋭的になつても市民運動としてはいかなものかと思う。わたしなどはついていけない。平和な風景の中で、戦争は二度と

してはいけないと、訴えていきたい。我が家の縁側には憲法9条が書いてある手ぬぐいが、道路から見えるようにかけてある。七色の虹の旗は、白抜きでPEACEと書いてあり、かなり大きく、二階の窓から見えるようにしてある。ゆるやかな市民の、楽しみながらやれる活動にしていきたいと思つている。相模原駅前ではトトロの着ぐるみを着て立っている。基地より森を、と思つている。新しくできた会は「自衛隊は来るな。相模補給廠の返還を求める市民の会」という。沖繩と相模原は連帯している。人ごとではないのだ。

相模原市は、横浜線の相模原駅前が米陸軍相模総合補給廠で、街の発展を妨げ



ている。こ
こは倉庫
のような
もので、空
き地も多
く、すぐに
返還され
てもおか
しくないと
思う。た
だし、全国
の基地の

(キャンプ座間前バス停で。左から3人目が筆者)

PCBの汚染処理をここでやっているとすれば土壌の入れ替えが必要になる。道路も分断され不便を強いられ、小田急線の乗り入れの話なども進まない。にもかかわらず、自衛隊（陸上自衛隊普通科連隊）が1300人来るという。

さらに、キャンプ座間があり、米陸軍第一軍団司令部が移駐してくるといふ。キャンプ座間と言っても座間市と相模原市にまたがり、相模原市内の面積のほうはるかに広い。こちらは「キャンプ座間への米陸軍第一軍団の移駐を歓迎しない会」という市民の会ができて1年になる。すでに、ラムズフェルド米国防長官に、はがきを1万枚だしている。昨年12月、座間サニープレイスで開かれた、結成から1年の記念講演では、『琉球新報』で基地問題を担当している記者、松元剛さんのおはなしを聞くことができた。沖縄国際大学に米軍ヘリが墜落したときの取材映像は貴重なものだった。

米軍再編の影響をもろに受け、基地強化どころか永久化につながる動きに、危機感を募らせている市民が、一人二人とキャンプ座間前のバス停に来るようになったのは95年12月の最初の水曜日だった。バスを待っているだけで、一人一人の思いなので、どこの誰かは知らない。バス機動隊に聞かれても答えられない。バスが来ても乗らないのは自由だ。ベンチに

座り、寒いのでひざかけをして、そのひざかけの模様が「基地はいらない」というのも珍しくもないし、こちらの好みにすぎない。どんな模様でも自由だ。主婦どうしの噂が広がり差し入れなどもある。雪の日は熱いレモンティーの差し入れがあった。車から男性が降りてきたときには何か言われるのかと構えてしまったけれど、通りがかりに寒そうに見えたらしい。どこかの自動販売機で買って引き返してきてくれた。そのときは4人だったが、6人のときも10人のときもある。

打ち合わせているわけでもないのに、誰が始めたのかもわたしは知らない。シュークリームの差し入れがあったとき、数が足りず、太るからと譲り合ったりもした。バスの運転手さんも理解してくれている。手を振ったり、がんばれよと声をかけてもらったり反応はいい。公安に写真を撮られるけれど、毎週水曜日、1時半から3時半、3月いっぱいはやるつもりだ。

座間市、相模原市とも、市民ぐるみの取り組みが始まっている。市民運動が、市長や議会とともに、自治会連合会や市民協議会（相模原市米軍基地返還促進等市民協議会、会長相模原市長）もすべて巻き込んで闘えるというのは、市制始まって以来の出来事ではないか。

相模原市の小川市長が「戦車にひかれ

ても闘う」と言えば、座間市の市長も「ミサイルが飛んできて闘う」と言っている。相模原市の人口は62万を超え、平均年齢40才と若く、ほとんどが新住民にもかかわらず、21万の署名「基地はいらない」が短期間に集まった。自治会連合会も気合いが入っているようだ。相模原市長は病氣入院中のところ病院を抜け出し、集会に出てきて声を枯らして訴えた。「だまっていたら百年先も基地の街」だと。

市民運動も、米軍基地はいらない、自衛隊来るな、というだけの共通の思いがあれば、誰でもどこへでも参加自由だと思ふ。政党や宗教の違いを超えて自由に出入りできる市民という立場で、自分の意見を言えるように、女性も子供も参加できる平和運動がいいと思っている。沖縄を想い、基地はいらない、世界のどこにも、と思つてがんばっている。今やらなくて、いつやるのだろう。わからないことも多く、傷つくこともあるけれど、屈辱に耐える力を沖縄から学んできた。まずは、自分との闘いだろうか。精神的余裕を失わず、おごらずに、好戦的にならないように気をつけたいものだ。（こまき・みどり、「自衛隊は来るな。相模原補給廠の返還を求める市民の会」共同代表）